

いつからキジは国鳥なのでしょう!?

あきた森づくり活動サポートセンターほかの記述

国鳥に選定されたのは1947年（昭和22年）のこと。日本鳥学会の学会誌「鳥」には、ほかにヤマドリ、ウグイス、ヒバリ、ハトなどの候補があったが大多数がキジを支持して決まったと報告されています。

その理由は、

- ①日本固有の種はキジとヤマドリだけ
- ②キジは渡り鳥でなく、本州、四国、九州で一年中姿を見ることができる
- ③大きく、肉の味がよく、狩猟の対象
- ④古事記、日本書紀に「キギシ」の名で記載があり、桃太郎にも登場して子供たちになじみがある(※古事記(712)上・歌謡「さ野つ鳥 岐芸斯(キギシ)は響(とよ)む」)
- ⑤雄は羽が美しく飛ぶ姿は力強く男性的。雌は山火事の火が巣に迫っても卵やひなを守り、母性愛と勇気の象徴のように言われる・・・との理由が挙げられました。

生活

主に地上を歩いて草の葉や実、昆虫、クモなどを食べる。春になると、オスは草地を中心に直径400mほどの縄張りを持ち、小高い盛土の上のようなところでその宣言をする。数羽のメスのグループがオスの縄張りの幾つか回って歩く。

求愛の母衣打ち(ほろうち)・ディスプレイ

繁殖期になると、オスは「ケン、ケケン」と叫ぶように鳴き、翼を素早く羽ばたかせてブルブルッと羽音を出す。これは、メスを呼ぶ求愛行動で「母衣打ち」(ホロ打ち)という。メスが寄って来ると赤い顔を膨張させて頭を下げ、翼を半開きにし、さらに尾羽の上面を彼女の方に向けて扇状に開き求愛のディスプレイをして交尾を迫る。キジの間では多妻や乱婚は珍しくない。

巣は、地面を浅く掘って、枯葉を敷いて6~12卵を産む。産卵期は4~7月。抱卵日数は23~25日ぐらい。オスは子育ての手伝いを一切しない。抱卵は、メスだけが行う。メスの地味な羽色(黄褐色に黒の斑模様)は、外敵から発見されにくいカモフラージュになる。ヒナは、生後間もなく親について歩くようになる。ヒナは生まれて間もなく立ち上がって歩き出し、母親の真似をして草の芽をついばんだりする。

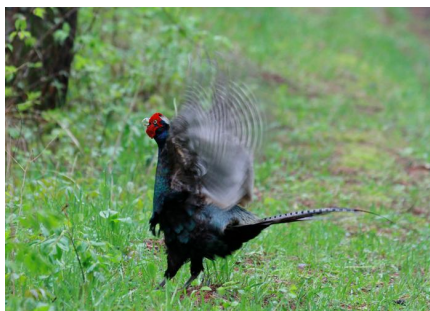
▲非繁殖期には、オス同士、メス同士の群れで生活していることが多い。夜は樹上で眠る。

擬傷行動

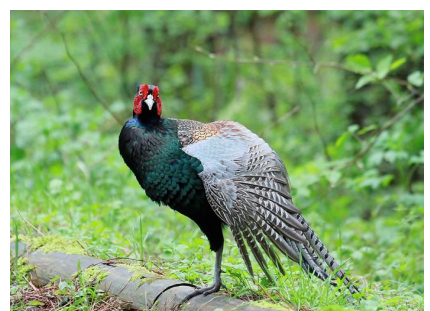
ヒナを連れたメスは、敵に気付くと、ケガを装って敵を引き付ける擬傷行動をとることが多い。その間、ヒナは草陰などに身を伏せて隠れる。オスとメスが一緒にいる時、敵に出会うと、派手な色のオスは、さらに声をあげて敵を引き付け、メスを逃がすような行動をとることもある。



↑メスの舞い



↑求愛の母衣打ち(ほろうち)



↑求愛のディスプレイ



頭かくして尻隠さず

雉(きじ)は、追われると草むらの中に頭を突っ込んで隠れたつもりでいるが、尾は丸見えになっていることから、一部だけを隠して、すべてを隠したつもりでいる愚かさを笑うことば。『江戸いろはかるた』の一つ。

←おとぎ話「桃太郎」に出てくる勇ましいキジを連想させる歩き方